



2024 年度 国際社会実習報告書

インドネシア／台湾



2024年度
国際社会実習報告書



国際社会実習報告書

2024年度

【Contents】

発刊にあたって.....	01
令和6年度「国際社会実習（オンライン海外調査実習）」の実施について 今井 典子	02
国際社会実習の振り返り 新見 幸大	09
国際社会実習報告書 刈谷 彩花	12
国際社会実習の振り返り 谷岡 奈緒	14
国際社会実習の振り返り 新庄 にこ	17
「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」報告書 高橋 俊	20
台湾スタディツアーを終えて 増田 舞七花	21
台湾スタディツアーを通して 山本 璃乃	25

発刊にあたって

高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース 2024 年度「国際社会実習報告書」をお届けいたします。2020 年度から 2021 年度にかけてはコロナ禍の影響により実習が実施されませんでした。2022 年度には 3 年ぶりに実習が再開され（同年度は 1 件）、2023 年度には 3 件、そして 2024 年度には 2 件の実習が実施されました。実習の機会も徐々に増え、少しずつ活気を取り戻しつつあります。ここで各実習の取り組みについて紹介します。「国際社会実習（オンライン海外調査実習）」は、昨年度に引き続き、インドネシアのブラビジャヤ大学との連携による 2 回目の実施となりました。この実習は、学生が自らの関心分野について海外大学との協働を通じて実践的な学びを深めることを目的としたものであり、本学からは 4 名の学生が参加し、それぞれのテーマに沿って教育活動に取り組みました。

「台湾スタディ・ツアー」（「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」）には 2 名の学生が参加し、それぞれのテーマに基づく調査を行いました。今回のスタディ・ツアーでは、大都会である台北と、歴史ある古都台南という、台湾国内でも対照的な都市を訪れることで、台湾社会の多様性について理解を深める機会となりました。ツアーを通じて学生たちが感じたこと、学んだこと、考えたことが報告としてまとめられていますので、ぜひご一読ください。

「国際社会実習」は、実習内容や実習先、学修レベルに応じて、以下の五つの区分に分かれています。国際社会コース開講科目ではありますが、コースや学部の枠を超え、全学に開かれた科目となっています。

スタディ・ツアー	外国語実習	国内調査実習
海外調査実習	フィールド・リサーチ	

こうした機会を通じて、学生たちが「リアルな体験」や、「当たり前が当たり前ではない」と気づく経験、そして「見たことのない景色」に出会うことを、今後も多くの学生に期待したいと思います。

最後に、本報告書の刊行にあたり、人文社会科学部長裁量経費から補助を受けました。感謝申し上げます。

2025 年 7 月

高知大学人文社会科学部
人文社会科学科国際社会コース長
遠山 茂樹

令和6年度「国際社会実習（オンライン海外調査実習）」の実施について

今井 典子（人文社会科学部 国際社会コース）



はじめに

オンライン形式での「国際社会実習（海外調査実習）」は、2024年度で2回目の実施となった。本実習の受け入れ先であるインドネシアのブラビジャヤ大学（University of Brawijaya：UB）とは、「国際社会実習」に加え、自律学習支援センター（OASIS）で実施している英語・日本語によるパートナーシップ・プログラムや、ゼミナール学生が参加する学生間研究交流などを通じて、継続的な交流を深めている。

本オンライン実習プログラムは、学生が自身の興味・関心のある分野、特に日本語教育や語学教育に関する実践的な学びを深めることを目的としている。具体的には、協力校の日本語クラスの授業支援、日本語担当教員のアシスタント業務、日本語学習者への支援などを通じて、実践的な経験を積む機会を提供する。また、参加学生は自身のリサーチに基づいた調査活動を協力校で実施することも可能である。

本実習を通じて、参加学生は主体性や自律性、計画力、実行力、課題解決力といった社会で求められる能力を向上させ、将来のキャリア構築につなげることが期待される。特に、アジア圏での実習では、多様な文化に触れる貴重な機会となる。グローバル化が進む現代においては、母語を共有しない者同士が英語でコミュニケーションを取る機会が一層増えると考えられる。そのため、異文化への理解を深め、多様性を体感することが重要である。さらに、本実習は、協力校の学生にとっては日本文化や高知の魅力を知る機会となり、一方で、高知大学の学生にとっては、協力校の国の文化を学ぶ貴重な経験となる。このような相互交流を通じて、今後の留学や国際交流のさらなる活発化が期待される。

1. 実習開始に向けて

実習への参加に向けて、7月3日（水）および10日（水）の昼休みに、同一内容の説明会を2回実施した。説明会では、本実習がオンラインで50時間実施されることに加え、高知大学における対面での事前・事後学習が10時間含まれ、これらの時間には準備時間も含まれること、また、実習の具体的な内容について説明を行った。説明会に参加した4名全員が履修登

録を完了し、実習への参加が確定した。

事前学習の開始に先立ち、受け入れ先であるブラビジャヤ大学（UB）と第1回の事前打ち合わせを、8月13日（火）15:00（インドネシア時間 13:00）より Zoom で実施した。この打ち合わせには、実習に参加予定の高知大学生と、UB からは日本語学科長を含む4名が参加した。内容は、参加者全員の自己紹介から始まり、実習内容についての協議が行われた。その結果、実習の開始時期を10月中旬とすることを確認し、学生が担当する授業科目として「聴解」「会話」「作文」「ゼミ（日本の紹介）」の四つが決定された。その後、UBの教員と学生は、メールやLINEなどを活用して実習開始に向けた準備を進めた。さらに、第2回の打ち合わせは10月16日（水）21:00（インドネシア時間 19:00）より実施された。これには、第1回の参加者に加え、UBから日本人教師の飯塚先生および西村先生も参加した。会議では、実習の具体的な進行内容についてより詳細な協議が行われ、スムーズな実施に向けての最終確認が行われた。

2. 国際社会実習の概要

2.1 対面事前学習(3時間)

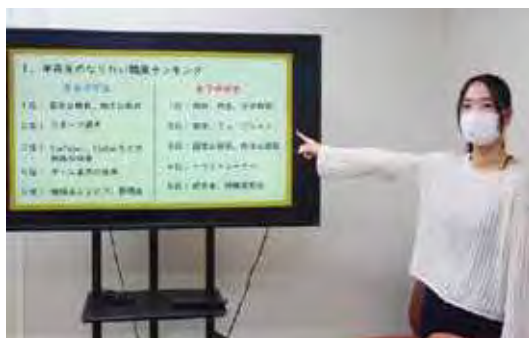
参加学生全員のスケジュールを調整し、10月2日（水）4限目に1回目の対面事前学習会を実施した。内容は、実習の目的と概要の確認、および2回目の事前学習会に向けた課題の説明であった。2回目の事前学習会については、全員のスケジュールが合う時間帯を通常の時間割内に設定することが難しかったため、10月8日（火）2限目と10日（木）3限目の2回に分けて実施した。



新見 幸大



刈谷 彩花



谷岡 奈緒



新庄 にこ

写真1 事前指導での発表の様子

この学習会では、参加学生によるリサーチ内容の発表と質疑応答を行った。発表テーマは、食事のマナー、人気の職業、特産品・食文化、年中行事であり、各自がリサーチした内容をプレゼンテーション形式で発表した（写真1 参照）。発表を通じて、参加学生は互いのリサーチ結果を共有し、実習に対する理解を深めることができた。また、発表を通じて実習への期待も一層高まり、積極的に取り組もうとする姿勢が見られた。

2.2 オンライン実習(50時間)

オンライン実習は、2024年10月31日（木）から12月6日（金）までの期間に実施された。本実習では、ブラビジャヤ大学（UB）の1年生および3年生を対象とした「聴解会話」「中級読解」「聴解会話」の各クラスに、参加学生がそれぞれ配属された（表1 参照）。昨年度と比較すると、今年の実習期間は短縮されたものの、その分、より集中した学習環境のもとで実施することができた。実習期間中、参加学生は多様な教育活動に積極的に携わり、日本語教育の現場で実践的な経験を積む機会となった。実習の最終日である12月6日には、教育実習の成果を発表する会が開催され、各学生が自身の活動内容や学びを共有した。

表1 実習の担当クラスと授業科目

学生氏名 (所属) (学年)	新見 幸大 国際社会コース 2年	刈谷 彩花 国際社会コース 2年	谷岡 奈緒 国際社会コース 2年	新庄 にと 国際社会コース 2年
担当クラス 授業科目名	1B 聴解会話 1B 中級読解 1C 中級読解 3C 聴解会話 3D 聴解会話 インターナショナルクラス	1B 聴解会話 1C 中級読解 3D 聴解会話 3E 聴解会話 インターナショナルクラス	1B 聴解会話 1C 中級読解 3C 聴解会話 インターナショナルクラス	1B 聴解会話 1C 中級読解 3C 聴解会話 3D 聴解会話 3E 聴解会話 インターナショナルクラス

（補足）数字（1・3）は学年、アルファベット（B・C・D・E）はクラス名を示す。

2.3 対面事後学習(7時間)

本実習の総括として、報告会および審査会を2025年1月7日（火）と10日（金）に実施した。事後学習の主な目的は、実習を通じて得た経験や学びを振り返り、それらを将来のキャリアにどのように活かすかを考察することである。具体的には、参加学生がそれぞれの実習内容、取り組んだ活動、学んだこと、見出した課題、および今後の対応策についてプレゼンテーション形式で発表を行った（写真2 参照）。

各プレゼンテーション後には質疑応答の時間を設け、参加学生同士が互いの経験を共有しながら、活発な意見交換が行われた。質疑応答では、実習で直面した困難やその解決策、今後の改善点について率直な意見が交わされ、学生同士の学びを深める機会となった。これらの発表を踏まえ、学生は実習の報告書作成に取り組んだ。実習での学びや気づき、今後の課題に対する考察などを詳細にまとめ、実習の成果として提出した。



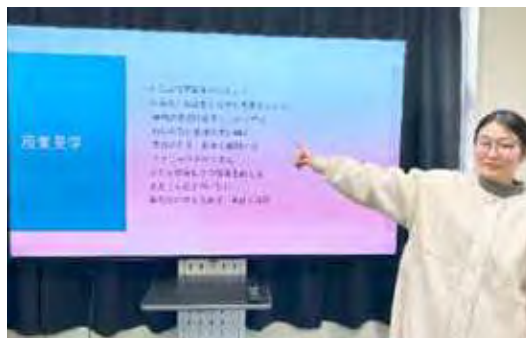
新見 幸大



刈谷 彩花



谷岡 奈緒



新庄 にこ

写真2 報告会・審査会の様子（1月7日・10日実施）

3. 国際社会実習報告会からの総評

オンラインでの実習報告会が2024年12月6日（金）17:00～18:00（インドネシア時間15:00～16:00）に実施された。当日は橋本由紀子先生にも陪席いただき、参加学生による発表が行われた。4名の発表内容の概要は以下（①～④）の通りである。

①新見幸大さんの発表

当該学生は、授業での工夫、反省点、および学びについて発表した。授業の工夫としては、易しい日本語の使用や、文字数を抑えたスライドを準備することで、内容を分かりやすく伝えることを意識した点を挙げていた。また、日本食や日本の店舗を紹介する際には、難しい日本語を避け、写真を多用することで視覚的に理解しやすいスライドを作成したという。この工夫により、UBの受講生にとって効果的な授業が展開できたと振り返った。一方で、反省点としては、時差を考慮せずに授業計画を立てたため、UBの先生方との連絡調整が必要となったことを挙げていた。この経験から、海外とのやり取りにおいては時差を考慮することの重要性を学んだという。また、難しい言葉を使用することで学生の理解が難しくなることを実感し、今後は学習者にとってわかりやすい言葉を選び、言語の調整を意識する必要があると実感している。さらに、日本人の先生の授業方法を参考にしたことで授業自体はスムーズに進められたものの、自身のオリジナリティが不足していた点を課題として挙げていた。発表のまとめとして、オンライン授業の難しさを実感するとともに、失敗を恐れずに挑戦し、より自分らしい授業を展開するべきだったと述べた。

UBの先生の模範授業や自身の試行錯誤を通じて、多くの学びを得ることができたことが伺えた。また、日本文化の紹介を工夫して成功させた点は高く評価できる。しかし、当初の目標としていた「授業計画通りに成功させること」については完全には達成できなかったと振り返り、今後の課題として意識していきたいと述べた。

②刈谷彩花さんの発表

当該学生は、授業を通じての反省点と学びについて発表した。授業の進め方に関しては、日本人の先生が実践していた「質問から始める」指導法を参考にしたことに触れ、特に授業の冒頭で学生の理解度を確認する質問を行うことで、授業をスムーズに進めることができたと振り返った。この方法は、学生の関心を引き出し、授業に対する積極的な姿勢を促す効果があったと述べている。一方で、準備不足や例文の不足を課題として挙げていた。授業をより分かりやすくするためには、独自の例をいくつか示すべきだったと考え、今後の改善点として認識したという。また、「授業中に予期せぬ質問があったか」という問いに対しては、説明が難しい日本語について質問される場面があったことを挙げた。その際、語彙の説明に対応するためにスライドを準備し、例を多く提示することの重要性を実感したという。さらに、イラストを活用することで、視覚的に理解しやすくなり、学生の理解を助ける効果があったと述べていた。

今回の経験を通じて、授業の進め方や事前準備の重要性を改めて認識したと振り返った。今後は、より多くの例を事前に用意し、学生の理解を深めるための工夫を積極的に取り入れていきたいと今後の展望を示した。このように、自身の経験を踏まえた具体的な改善策と意欲が見られ、今後の授業運営における成長が期待される。

③谷岡奈緒さんの発表

当該学生は、授業を通じての反省点と学びについて発表した。特に、インドネシアの学生が劇を通じて日本語を楽しく学んでいる点に注目し、学習内容を取り入れた劇活動が印象的だったと述べた。一方で、自身の授業では、途中で学生の理解度を十分に確認できなかった点を課題として挙げた。また、模範授業を通じて、発言が苦手な学生にも発言の機会を与えながら進める工夫が重要であることを学んだと述べている。授業中に全員が積極的に参加できるように配慮することが、授業の質を高める上で重要であると認識したという。また、報告では授業の良かった点や改善点を具体的に説明することで、授業運営の流れがより明確になったと振り返った。特に、スライドの構成が分かりやすく、視覚的な工夫が学習者の理解を助ける効果があったと述べた。今回の経験を通じて、言語を教えることや授業設計の難しさを実感するとともに、異文化に触れる楽しさも学んだようである。日本人学生と比較して、インドネシアの学生は授業に積極的に参加する姿勢が印象的であり、手ごたえを感じながら交流を楽しむことができたと述べていた。最後に、来年度の受講生へのアドバイスとして、模擬授業の経験を積むことが実際の授業運営において非常に有効であると強調していた。実践的な経験を積むことで、実際の授業でも落ち着いて対応できるようになり、より充実した授業が行えると述べ、今後の実習に向けての助言とした。

④新庄にこさんの発表

当該学生は、他の学生同様、授業を通じての反省点と学びについて発表した。授業中、学生からの質問に対して十分に説明できなかったこと、また、そのような質問が来ることを予期していなかった点を課題として挙げた。この経験から、事前に予測される質問を想定し、より丁寧な準備が必要であると述べている。一方で、インドネシアの学生の反応を通じて、自身の伝えたいことがしっかり伝わっていると実感できた場面があり、とても嬉しかったと振り返った。また、授業内容を説明する際に、インドネシアとの比較を取り入れて説明を行えば、より効果的に伝えられたと考え、今後の改善点として認識した。さらに、インドネシアの学生の語彙の豊富さに感心するとともに、学んだ文型をうまく活用できなかった場面があったことも反省点として挙げていた。これは、事前準備の不足だけでなく、授業中の柔軟な対応力にも課題があると感じたという。しかし、そうした反省点がある中でも、日本語を教えることの面白さを改めて実感できたと述べた。また、授業の進行においては、クラス内で学生の日本語レベルに差があり、授業の進め方に戸惑う場面もあったという。「自分らしい授業ができたか」という問いに対しては、細かい工夫や学生の反応をよく観察しながら、丁寧に教えることを意識して取り組んだと回答した。さらに、インドネシアの学生が日本語を応用し、実際に使っている姿を目の当たりにしたことが、日本語を教える面白さを実感する大きな要因となったと振り返った。今回の経験を通じて、新庄さんは、日本語教育の魅力をさらに深く理解することができたと締めくくった。実際の授業経験から得られた気づきや学びは、今後の授業運営において大きな糧となることが期待される。

⑤ブラビジャヤ大学の担当者からの講評

UBの担当者からは、日本人学生が模範授業や日本人の先生の指導方法をよく観察し、効果的だと感じた手法を実際の授業に応用して活用している点が評価された。また、学生たちが授業にそれらを積極的に取り組みながら楽しんでいた姿勢に好感を持ち、オンライン授業という難しい環境の中でもよく頑張ったとの励ましの言葉があった。さらに、「ぜひブラビジャヤ大学に来てほしい」という歓迎の声もあり、学生たちの努力が受け入れ先にも好意的に受け止められていたことが伺えた。

総評として、今回の実習を通じて、4人の学生は計画を立て、実際に授業を行うことで初めて気づくことが多く、学びが深まったのではないかとコメントがあった。また、模範例を観察し、それを取り入れて試すこと、さらに失敗から学ぶことの重要性を理解し、実習の趣旨を十分に活かして取り組んでいたと評価された。何よりも、4人全員が日本語を教えることを楽しんでいただ点が非常に印象的であり、その積極的な姿勢は今後の学びにも良い影響を与えるだろうと期待が寄せられた。一方で、課題としては、学生たちはそれぞれ反省点や改善点を認識しているものの、それらをどのように克服し、再度授業を行った際に本当に改善されるかを検証する機会を持つことで、より実践的な学びにつながるのではないかと指摘があった。単なる振り返りに留まらず、次の実践の場でどのように改善策を生かせるかが重要であり、今後の授業実践に向けてさらなる工夫と準備が期待される。

以上のように、UBの先生方は学生たちの努力と成長に対して高い評価を示すとともに、今

後のさらなる成長にも期待を寄せている。今後は、今回の実習で得た反省点を踏まえ、より実践的な改善に取り組むことが求められることになる。

おわりに

今回の実施に向けた準備の一環として、2024年3月18日から20日にかけてブラビジャヤ大学を訪問し、現地の先生方と対面で話し合いを行った。訪問中には、複数の日本語クラスの授業を実際に見学する機会を提供いただくと共に、前回の国際社会実習に関する貴重な意見や感想を直接伺うことができた。これらの意見は、2024年度の実習プログラムの改善に大いに役立ったと考えている。特に、実習における課題として、学生との円滑な連絡方法が挙げられていた。この課題に対しては、事前オリエンテーションの段階で具体的な対応策を講じ、実習期間中もスムーズな連絡体制を整えることができた。これにより、学生たちが安心して実習に臨む環境が整備され、実習の質の向上につながったと考えている。

また、学生にとって今回のオンライン実習で得た経験や学びは、非常に価値のあるものであった。実習を通じて得た気づきや反省は、今後の対面での日本語教育実習はもちろん、ブラビジャヤ大学との協定校留学にも活かされ、さらに充実した学びに発展することが期待される。学生たちは、実習を通して得たスキルや知識をもとに、自らの成長を実感するとともに、今後の学習やキャリア形成においても自信を持って取り組んでいけると考えられる。

次年度に向けては、今回の実習で得た経験と反省を基に、さらなる改善を図り、より充実した実習プログラムの構築に取り組んでいきたい。引き続き、ブラビジャヤ大学との協力関係を深めながら、学生にとって実り多い学びの場を提供していくつもりである。

謝辞

この度の実習に際して、ご協力いただきましたブラビジャヤ大学の関係者の多くの皆様に、心より感謝の意を表します。2023年3月および2024年3月の二度にわたる訪問では、直接お会いし対話の機会を賜り、貴重な意見交換をさせていただきました。このような経験は、実習の質を高める上で非常に重要であり、深く感謝しております。

国際社会実習の振り返り

人文社会科学部 人文社会科学科

国際社会コース 2年

B231G249P 新見 幸大

はじめに

この国際社会実習に参加した理由は、実際の日本語学習者に対して日本語の授業や文化を紹介し、実践的な経験を積むことを目指していたためである。また、その経験を通じて得られる知識や学びを、今後の教育実習やインターンシップに活かしたいと考えている。

本実習はインドネシアのブラビジャヤ大学の日本語クラスで Google Meet や Zoom を利用してオンライン形式で行われた。本実習における活動は「事前学習」、「授業見学」、「文化紹介」、「日本語授業」、「実習後発表」の五つで構成されている。「事前学習」ではインドネシアの文化や特性を理解するために、インドネシアの食文化、祝祭日、特産品などの特徴を整理し、パワーポイントを作成して実習生同士で発表を行った。「授業見学」では、ブラビジャヤ大学の日本語クラスにおいて、五つのクラスの中から飯塚先生（ブラビジャヤ大学日本語担当教員）が教えるCクラスの授業を見学した。「文化紹介」は、日本の「食文化」と日常生活で頻繁に利用されるスーパーマーケットやドラッグストアについて事前学習で得た情報との比較を通じて紹介した。「日本語授業」は、『みんなの日本語Ⅱ』の49課と50課の「会話」と「練習C」を、見学時と同様にCクラスで実施した。「実習後発表」は、実習を通じて、得た知識や自らの気づき、考察について、ブラビジャヤ大学及び高知大学の教員と共に振り返りを行い、フィードバックを受ける機会であった。

1. 実習を通じて学んだこと・考えたこと

1.1 事前学習について

インドネシアの食文化を調査する中で、特に印象に残ったのはハラル料理である。ハラル料理はイスラム教の教義に基づき、豚肉やアルコールを含まない料理を指す。日本では宗教に配慮した料理が少ないと考えていたが、調査を進めるうちに各地域にハラル料理を提供する店舗が存在することを知り、日本のグローバル化の進展を再認識した。また、食文化はその国の宗教や気候、価値観を理解する手がかりとなり、国の特性を形成する重要な要素であると実感した。今後、他国についての調査を行う際には、まず食文化に注目することが有意義であると考えられるようになった。

1.2 授業見学について

これまで海外で日本語教師の授業を見学した経験はなく、授業の進め方や学習者への対応や反応に強い関心を持っていた。実際の見学を通じて、『みんなの日本語』を活用した授業運営の方法や、ミスや質問への迅速な対応に必要な事前準備、学習者の真剣な姿勢など、多くの学びが得られた。これらの経験は日本語教育の実践的理解を深め、今後の教育活動において重要

な示唆を与えるものであった。

1.3 文化紹介について

日本の食文化を紹介した際には学習者の関心を引くことができたが、インドネシアの食文化を紹介した際には、「別にそんなことはない」、「それは古い考え方だ」といった反応があり、自身の調査不足を痛感した。インドネシアを一括りに捉え、地域差や情報の新旧に十分な配慮ができていなかったことが課題として浮き彫りになった。この経験は、日本語教育においても学習者の文化的背景を理解することの重要性を示している。一方で、日本のスーパーマーケットやドラッグストア、家電量販店など、日常生活で役立つ情報を紹介した際には学習者の関心を集め、日本での生活に役立つ情報を提供できたと感じた。また、文化紹介は単なる情報提供にとどまらず、学習者が活動を通じてこれまで学習した文型や表現を復習し、新たな語彙やフレーズを習得する機会となることが重要であると学んだ。

1.4 日本語授業について

これまで長時間の日本語授業を担当した経験はなく、大学の授業の一環として日本人学生を対象に短時間行ったことがあるのみであった。今回はオンラインで海外の学習者を対象としたため、大きな不安と緊張を感じ、ミスを避けるべく入念に授業準備を行った。具体的には、飯塚先生の授業見学で学んだ進め方や話し方を取り入れ、発言予定の言葉を繰り返し練習し、学習者がつまづきやすいポイントを把握するために教材分析にも力を入れた。その結果、大きなミスなく授業を終えることができたが、内容は通常の授業と大きく変わらないものとなってしまった。この経験を通じて、自分ならではの授業スタイルを模索する必要性を感じた。学習者にとって印象に残る授業を提供するためには、自身の個性や強みを活かした指導が重要であり、そのためには実践経験を積みながら試行錯誤を重ねることが不可欠であると学んだ。

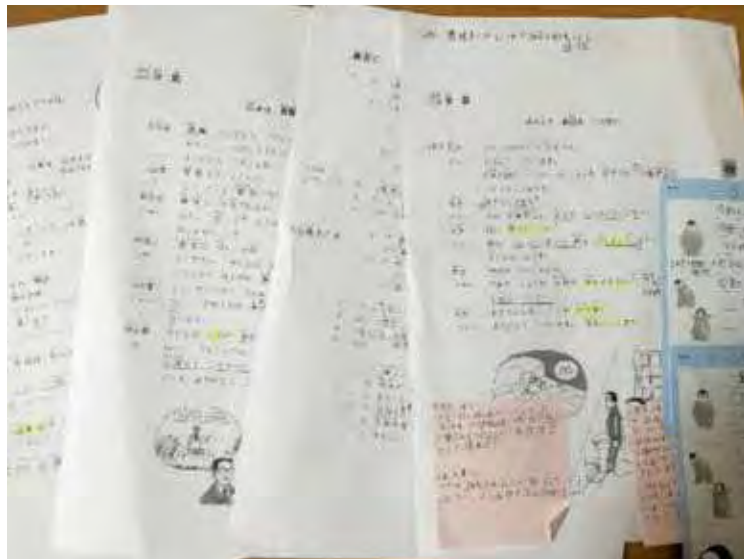
2. これからの日本語教育活動について

本実習を通じて、学習者のバックグラウンドや母国の特徴を調査する方法、授業の進め方など、今後の日本語教育において有益な知見を得ることができた。特に、文化紹介を単なる情報提供の場とするのではなく、日本語の文型や表現を学ぶ機会として活用することの重要性を認識した。

今後、日本語の教科書を用いた授業と同様に、日本文化を紹介する機会も多くあると考えられる。その際、本実習で学んだ指導法を応用することで、学習者の日本語運用能力の向上に寄与できるとともに、文化紹介の手法や文型指導に関する理解を深めることができる。これは、日本語教師としての指導力向上にもつながる重要な経験となる。さらに、年度末にはベトナムでの日本語教員インターンシップが予定されており、本実習で得た経験を実践の場で活かすことが求められる。本実習の学びを踏まえ、より効果的な指導法の確立を目指していきたい。



授業風景



授業使用テキスト内容

①にほんのしよくじ
・～とくちょう～
・～しよくじのルール～

②インドネシアのしよくじ
・～とくちょう～
・～しよくじのルール～

③日本とインドネシアのしよくじのちがいを。





文化紹介スライド

国際社会実習報告書

人文社会科学部 人文社会科学科

国際社会コース 2年

B231G222P 刈谷 彩花

1. 実習内容

実習は、事前学習、文化紹介、授業見学、会話の授業の4つの活動で構成された。事前学習では、インドネシアの特徴や文化について調査し、日本との違いや共通点を比較してプレゼンテーションを作成し発表した。作成した資料を基に高知大学の学生同士で発表し合い、意見交換を行った。

文化紹介では、一人あたり約20分のプレゼンテーションを2回行い、日本の文化を紹介した。授業見学では、ブラビジャヤ大学で日本語の会話授業を担当する教員の授業を見学し、実際の教育現場について理解を深めた。会話の授業では、日本語教材『みんなの日本語 初級Ⅱ』の第49課と第50課を担当し、90分間の授業を行った。

2. 実習を通して気づいたこと、学んだこと

文化紹介では、日本とインドネシアの食べ物について紹介した。インドネシアの学生は発表に興味を持って積極的に聞いてくれ、知っている日本の食べ物を尋ねると多くの回答が返ってきた。彼らは日本語だけでなく、日本文化そのものにも高い関心を持っている印象を受けた。また、インドネシアの食べ物やその作り方、使用される食材などについても、間違いを恐れず積極的に日本語で説明してくれた。このことから、ブラビジャヤ大学の学生は日本語学習に対して非常に高いモチベーションを持っていると感じた。

授業見学では、『みんなの日本語 初級Ⅱ』の第47課と第48課の会話授業を見学した。導入では、使用される文法をスライドで示しながら丁寧に説明していた。本文の会話を聞いて読んだ後は、「ここには誰がいますか」と問いかけ、会話の場面や登場人物を確認していた。また、学生の理解度を確認するため、「わからないことばはありますか」と尋ねたり、学生からの質問がない場合には本文中の単語を取り上げて「これはどのような意味ですか」と問いかけ、理解を促していた。説明の際には、単語の意味だけでなく、使用される場面や相手、例文なども交えて丁寧に説明していたことが印象的だった。

練習問題（練習C）では、問題を解き学生たち全員で読んだ後に、クラスを会話文のAさんとBさんの二つに分けて会話練習を行っていた。さらに、いくつかの問題を解いた後には、学んだ内容をもとにペアでオリジナルの会話を作成し、いくつかのペアに発表してもらう活動も実施されていた。このようにオリジナルの会話を作ることは、学生が理解しているかを確認する良い方法であり、発表することでアウトプットにもつながり、知識の定着に効果的であると感じた。

自分が担当した会話授業では、事前にブラビジャヤ大学の学生が尋ねてきそうな単語を調べて準備していた。しかし、実際の授業では予想外の単語の意味を尋ねられ、うまく対応できな

い場面もあった。この経験から、予想だけに頼るのではなく、あらゆる内容をやさしい日本語で説明できるよう、より丁寧な準備が必要であると実感した。また、導入では「この会話で使われている文法は〇〇で、こういう場面で使います」と説明はできたものの、単なる説明にとどまってしまったため、実際の会話例を準備しておけば、よりわかりやすい導入ができたのではないかと感じた。

授業見学では、ブラビジャヤ大学の先生が問題の答えをその都度パソコンに書き込みながら示していた。それを参考にして授業を行ったが、オンライン上では書き込んだ内容がうまく反映されず、授業がスムーズに進まないことがあった。あらかじめ答えを書き込んだスライドを準備しておけば、書き込む時間を省け、よりスムーズに授業を進行できたと感じた。また、本文を読んでもらう際には、グループ分けの指示がうまく伝わらず、ブラビジャヤ大学の先生の力を借りることもあった。

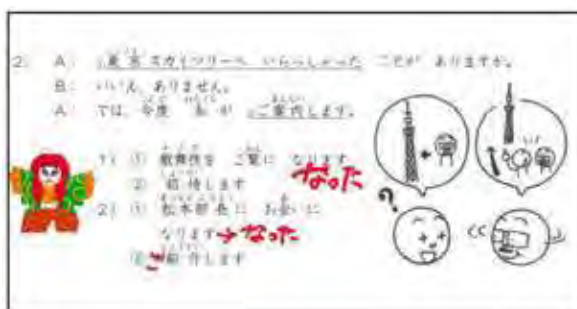
さらに、練習問題（練習C）の指導では、授業見学で見たオリジナル会話作成の活動を取り入れたが、具体的な会話例やシチュエーションのサポートが不足していたため、学生にうまく伝わらなかった。今後は、いくつかの例を提示してからオリジナルの会話を作ってもらうなどの工夫が必要だと感じた。

3. 今後どのように活かしていくか

今回、初めて一人で日本語の授業を担当し、スムーズに進めることは難しかったものの、さまざまな反省点や改善点に気づくことができ、非常に貴重な経験となった。授業の進め方について見学し、実際に実践することは難しかったが、ブラビジャヤ大学の学生が積極的に参加してくれたことで、過度に緊張せずに授業を進めることができた。授業終了後には、ブラビジャヤ大学の先生から良かった点や改善点についてフィードバックを受けることができ、自身の指導方法を客観的に見直す機会となった。その結果、今後の課題や改善点が明確になったと感じている。また、学生たちは日本語学習に積極的で、わからないことは素直に質問する姿勢を見せてくれた。この姿勢は、教える側としても大きな刺激となった。今後、模擬授業や実習を行う際には、どのような質問にも対応できるよう事前準備を徹底し、教科書に載っていない例文も用意するなど、今回得た学びを活かしていきたい。



文化紹介で使用したスライド



授業で使用したスライド

国際社会実習の振り返り

人文社会科学部 人文社会科学科

国際社会コース 2年

B231G244M 谷岡 奈緒

はじめに

筆者は2024年2学期にインドネシアのブラビジャヤ大学において、オンラインで日本語教育の国際社会実習を行った。実習では、日本文化の紹介、ブラビジャヤ大学の先生方による日本語授業の見学、さらには実際に授業の準備や運営も経験した。本稿では、実習の具体的な内容、実習を通して学んだこと、そして全体を振り返っての考察について述べていく。

1. 実習内容

全体の実習の流れとしてはまず事前学習があり、その後ブラビジャヤ大学の先生方による授業の見学をしたうえで実際に授業運営を行い、最後に事後オリエンテーションをすることで活動の振り返りをした。

まず事前学習では、私たちがインドネシアの文化を学ぶとともに、ブラビジャヤ大学の学生にも日本の文化を知ってもらうために、両国の文化に関するプレゼンテーションを作成し、発表した。筆者は日本の文化を一つに絞らず、食やアニメといったさまざまなジャンルをランキング形式で紹介した。この事前学習では、インドネシアについての知識がない状態から互いに発表し合って、インドネシアの食文化や宗教、祭日などを学ぶことができ、交流をする前からより関心をもって取り組むことができた。

事前学習を終えると、私たちはブラビジャヤ大学の日本人の先生方による授業の見学を行った。筆者が見学した授業は「聴解会話3」であった。この授業はブラビジャヤ大学の学生たちが、各グループで考えた劇を発表することから始まった。学生たちが学んだ表現や文型を用いて各グループで自作の劇を発表していた。劇の内容に決まりはなく、学生たちは自由に発想し、学びを表現していた。発表後には先生から表現や文型に関するフィードバックがあり、学生たちが楽しみながら学習を深められる良い機会であると感じた。

授業見学を終えると、私たちは各自で授業の準備に取り掛かった。授業で使用されていた教科書は『みんなの日本語』であり、私たちが担当した授業は49課と50課の「会話」と「練習C」であった。筆者は教科書と先生の授業を参考にしながら、学習者がつまづきそうな語彙について、やさしい日本語で言い換えられるように確認した。また、自身が授業を行う予定の、一つ前の授業で扱われた文型や表現の振り返りができるよう準備や、練習問題で扱う日本の文化に関する写真を用意して、学習者の興味を引くような授業づくりを心がけた。

実際に行った授業運営では、授業自体はスムーズに進行し写真を用いた説明では学習者の反応もよく興味を持ってもらうことができた実感した。しかし反省すべき点も多かったと同時に感じた。授業の途中で何度か分からない点がないか学習者に確認をし、分からない場合は質問をするように声をかけたが、手が上がることはなく、こちらから尋ねて初めて「分からない」

と答える場面もあった。また今回の国際社会実習が筆者にとって初めて授業運営をする機会であったため、不安や緊張から授業を先生のお手本通りに進めすぎてしまい、自分の個性やアイデアを十分に生かせなかったと感じている。

これらの経験を踏まえ、実習を通して学んだことについて、特に授業運営の視点から次に述べていく。

2. 実習を通して学んだこと

授業運営を通して、筆者は大きく三つの反省点に気づき、それらを踏まえて日本語授業において重要な点について考えを深めることができた。

まず一つ目は、授業準備や授業運営をするにあたり、日本人の視点が強く出てしまったことである。日本語教育の授業において日本人の考え方や視点は重要であるが、語彙や表現の説明をするにあたり、これが負の影響を与えとは思わなかった。私たち日本人が日常的に使う語彙が教科書で多用されていることから、特に意識することなく授業準備や授業運営を筆者は進めていた。しかし、実際の授業で学習者に意味を確認されると、どのように説明してよいか困る場面があった。このことから、学習者の視点と自身の視点の違いを意識し、説明時には学習者が理解しやすい言葉や例を用いる必要があると強く感じた。

二つ目の反省点は、学習者にアウトプットの機会を増やそうと考えた結果、教科書のリポートが単なる作業のようになってしまったことである。筆者は、語彙や表現に多く触れることで記憶の定着につながると考え、本文や練習問題を複数回読ませた。しかし、繰り返すことに意識が向きすぎたため、学習者は内容を意識せず機械的に読んでしまい、効果的なアウトプットにはつながらなかったように思う。この経験から、単に読ませるだけでなく、教師が問題を作成して解かせたり、学習者自身に語彙や表現を使って文を作らせたりするなど、意識的にアウトプットさせる工夫が重要だと学んだ。

三つ目の反省点は、学習者全体の様子を見ながら授業を進めることができなかった点である。筆者にとって今回が初めての授業運営であったため、緊張しながらも計画通りに進めようと意識していた。その結果、授業中は自身の問いかけに反応してくれる学習者にばかり注意が向いてしまい、全体の理解度を十分に把握できていなかった。場合によっては、一部の学習者が授業に退屈してしまっていたかもしれない。この経験から、教師は常に学習者全体の様子を観察し、状況に応じて柔軟に授業を進めることの重要性を学んだ。

3. 全体を振り返って考えたこと

今回の実習を振り返ると、授業運営における柔軟性の重要性和、教師としての自己成長の機会を得られたと感じている。授業を進める中では、学習者の様子を常に観察し、状況に応じて臨機応変に対応したり、進行具合を調整したりする柔軟さが求められることを実感した。また、授業準備においても、ただ教科書に沿って進めるのではなく、写真やロールプレイ、絵カードなどの教材を活用して工夫することの重要性に気づいた。こうした工夫は、学習者の興味を引くきっかけとなり、より積極的に学びに取り組んでもらうことにつながると感じた。また、自ら意欲的に授業を考えることで、教師としての成長にも結びつくと考えている。さらに、今回

の国際社会実習では、ブラビジャヤ大学の学生の皆さんが私たちの授業に積極的に参加してくれたことが印象的だった。質問には積極的に答え、わからないことは確認するなど、意欲的に学ぼうとする姿勢が多く見られた。こうした姿勢を目の当たりにし、学生としても負けないように、授業で多くのことを吸収しなければならないと感じたと同時に、教師としては、学習者の期待に応えられるような知識と授業運営力を身につける必要があると強く思った。学習者の積極的な姿勢は、自身にとっても大きな刺激となった。

おわりに

本稿では、インドネシアのブラビジャヤ大学とオンラインで行った国際社会実習について、実習の内容とそこで学んだこと、反省点を振り返りながら述べた。国際社会実習を通して、日本語教師としてのスキルや授業準備の重要性、そして学習者の視点を意識することの大切さを学んだ。今後はこれらの貴重な経験を基に、自分自身の授業を運営する力を高め、学習者にとってより効果的な授業を提供できるように一層努力していきたい。



文化紹介スライド



授業風景

国際社会実習の振り返り

人文社会科学部 人文社会科学科

国際社会コース 2年

B231G238Y 新庄 にこ

1. 実施内容

今回の国際社会実習で実施したことは、①事前学習、②授業見学、③文化紹介、④授業、⑤実習発表の五つである。

①は、実習開始前にインドネシアについて理解を深めるために行った。実習に参加した4人がそれぞれテーマを決めてインドネシアについて調査し、発表した。

②③④では、Zoom または、Google Meet を用いてブラビジャヤ大学の授業に参加した。ブラビジャヤ大学の先生方とは Whats App でやり取りをした。②では、教科書『みんなの日本語』の会話の授業を見学した。③では、1回20分ほどの文化紹介を1人2回ずつ担当した。①で調べたことをベースに日本との比較を取り入れたり、やさしい日本語を意識したりしながら文化紹介を行った。④では、②で授業見学をしたクラスで、それぞれが教科書の会話の授業をした。

⑤では、②③④で行った内容とその振り返りをブラビジャヤ大学の先生方、高知大学の先生方に向けて発表した。

2. 学んだこと、考えたこと

まず、事前学習についてまとめる。事前学習では、主にインドネシアの祝祭日について調べた。事前学習の前、私はインドネシアに対して、リゾート地というイメージしか持っていなかった。インドネシアは日本と同じアジアの国であり、インドネシアから日本に多くの人が来ているのにも関わらず、自分は何も知らなかったことに気づいた。事前学習を通して、インドネシアが多民族・多宗教の国であることを知った。お正月が年に4回あることは、日本のお正月しか知らない私にとって、不思議で、調べてみてもその感覚を完全には理解できなかった。国際社会実習の中でこの知識が活かされたかはわからないが、授業外でインドネシアの方と関わる時にとても役に立った。相手の国や文化を少し知っていたことで、話題が出た際に理解が深まり、認識のズレを修正しながら新たな知識も得られた。まだインドネシアについてはほんの一部しか知らないが、知れば知るほど面白いと感じている。インターネットで得た知識だけでは理解が浅かったが、人と実際に関わりながら情報を整理することで、自分の知識として身についた。調べただけで知った気にならず、実際に確かめてみるのが大切だと思った。

次に、授業見学についてまとめる。実際に日本語の授業が行われている場に参加するのは、今回が初めてだったため、全てが新鮮で、学んだことが本当に多かった。日本語教育について勉強しているものの、日本語の授業はこういう風にするのかとここで初めて感じる事ができた。私は同じ課を扱った授業を2クラス見学することができたので、同じ内容を扱っていても、先生の対応が学習者の反応やレベルによって変化することを見ることができた。これは、とても貴重な機会だった。今まで、日本語教師は臨機応変だと教えられていたが、教案をしっかり

固めるのにどうやって臨機応変に対応するのだろうと思っていたので、授業見学でその答えになる姿を見ることができたことは、私にとって本当に大きな学びになった。授業見学のときに得た感覚をずっと忘れないようにしようと思った。

最後に、文化紹介や授業についてまとめる。日本の文化を紹介することは、思っていた以上に難しかった。紹介する内容の選定や、やさしい日本語で説明すること、20分という時間内で一方的にならないように工夫することに苦勞した。説明が多くなってしまい、十分に伝えきれなかったと感じる。授業についても、学習者のレベルへの配慮、時間の管理、スライドの文字の大きさやイラストの工夫など、反省点は多い。

ただ、悪いことばかりではなかった。学生たちはずっと楽しそうに、私の拙い説明にも一生懸命向き合ってくれた。授業で学生たちが劇をしているとき、本当に日本語が生きているみたいだった。新しい日本語に出会うことができた。先生方も相談に乗ってくれたり、アドバイスをしてくれたり、丁寧にサポートをしてくださり、貴重な助言をいただいた。反省点は速やかに改善し、より良い文化紹介や授業ができるよう努力したいと思った。

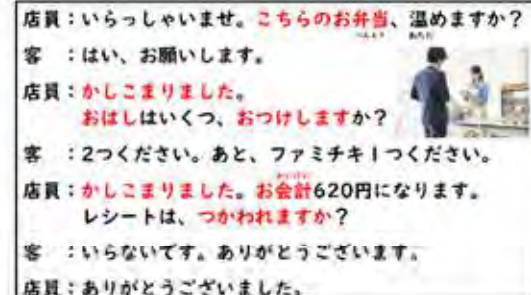
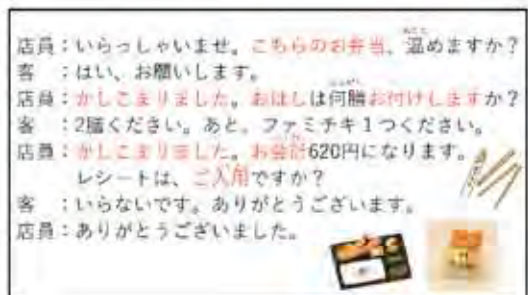
3. 今後に活かしたいこと

私は今後も日本語教育に関わっていくつもりであり、日本語や日本文化を学習者に教える機会があると考えている。この実習で得た学びは多く、様々な場面で活かせると感じている。特に意識したいのは、先生や学習者と積極的に関わることである。授業見学では、先生が学生と会話をしながら授業を進める様子が印象に残っている。身近で実際に使いそうな話題が取り入れられており、学生たちだけでなく、先生自身も楽しんでいるようだった。学生と関わることで、レベルやニーズを把握できたり、その人たちに合った授業を考えることができる。学生たちとの会話だけでは見えてこなかった細かな部分は、先生方と関わることで見えてくることがある。先生方のニーズも反映させることができれば、学習者にとってさらに効果的な授業を考えることができる。困った時は積極的に質問や相談を行い、普段から多くの人と関わることで、良い雰囲気づくりにもつながると考える。今後はこの点を特に意識して行動していきたい。

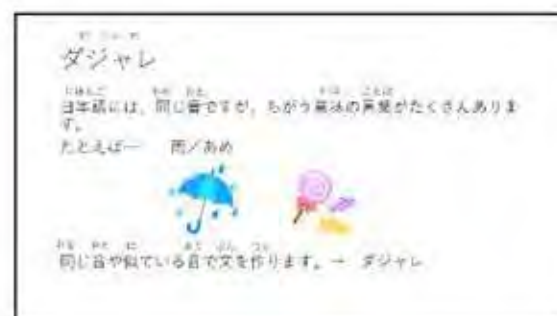
授業スライド 修正前



授業スライド 修正後



文化紹介



「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」報告書

高橋 俊

2025年2月17日～22日まで、台湾にてスタディ・ツアーを行った。

今回のスタディ・ツアーでは、参加者の2名の学生がそれぞれの興味や関心に合わせて、現地で簡単な調査を行った。事前指導では台湾の歴史や中国語についてレクチャーを行い、それぞれがどういうテーマを調査するかを決めていった。台湾では、故宮博物院などを参観しつつ、自身のテーマについて調査を行った。帰国後には成果報告会を行った。

例年のスタディ・ツアーでは引率者が手取り足取り「世話」を焼く必要があったが、今回の2名は自立心が強く、自分たちでほぼすべての行動を行っていた。スタディ・ツアーは現地での調査のみならず、海外でいかに生活を行うかについても学ぶ場であるが、今回の参加者2名はその課題も見事に成し遂げたといえる。

今回は台北・台南という2都市を訪問したが、大都会の台北に古都台南という、同じ台湾内でも両極といえる都市を回り、比較できたことは、きわめて有意義であった。両都市間の移動は高速鉄道を利用したが、乗客や乗務員の姿からも、学ぶものは多かった。

現在、台湾は激動の時代を迎えている。その台湾の2025年2月を切り取った記録という意味でも、極めて意味のあるレポートになっていると思われる。ぜひ、お読みいただき、台湾への興味を深めてほしい。

【スケジュール】

- 2月17日 高知→岡山→台北
- 2月18日 台北散策（士林夜市等）
- 2月19日 台北→台南、台南散策
- 2月20日 台南→台北
- 2月21日 台北散策（故宮博物院等）
- 2月22日 台北→岡山→高知



【費用（学生1人）】

- 国内旅費：12,000 円
- 航空券：45,800 円
- ホテル：5,000 円×5泊＝25,000 円
- 台北—台南移動：5,000 × 2
- 食費・入場料・その他：30,000 円
- 合計：12,2800 円



台湾スタディツアーを終えて

B241G268R 増田 舞七花

台湾スタディツアーでは日本での暮らしとの文化の違いを感じることができた。

まず、台湾に到着して文化の違いを感じたのは、トイレではトイレットペーパーが流せないということである。日本では公園のトイレでも、どんなところに旅行に行ってもトイレットペーパーを流せるところが圧倒的に多い。しかし、台湾では日本とは逆にトイレットペーパーを流せないところがほとんどであった。ホテルでも高級ホテルでは日本と同様に流すことができるが、高級ホテル以下では流せず私自身台湾で最初にカルチャーショックを受けた出来事であった。また台湾のトイレは手を乾かすハンドドライヤーは少なく、ハンドタオルがトイレにあり使用するというものだった。日本は機械化が進んでいて、どこに行っても安心してトイレを使うことができるということに感謝しないとイケないと感じた瞬間であった。

台湾では様々なものを食べて、台湾独自の食文化を知ることができた。2月17日（1日目）には台湾で最初にコンビニエンスストアに行きお弁当を購入した。軟焼肉（豚のスペアリブ）の弁当であった。中には湯葉の煮込み、ソーセージなどが入っている。全体的に味が濃い味付けで、少し甘味がある。2月18日（2日目）は迪化街では台湾で有名な豆花を食べた。味は全体的に薄めだが朝食として食べるにはちょうど良い味付けで地元の人も食べていた。豆花の中には小豆、タロイモ団子、コーヒーゼリーが入っており、優しい味付けになっていた。豆花を販売している飲食店ではいろいろな組み合わせができるように様々なトッピングが用意されている。また、迪化街では生鮮食品や調味料がたくさん販売されており、地元の人だけでなく観光客も買いに訪れていた。お客さんの年齢層は高めであった。日本人観光客も多く朝早くから行動している人が多い印象であった。士林夜市では胡椒饅を食べた。胡椒饅は夜市で人気の食べ物であり、売り切れている商品も数多くあった。胡椒饅は壺のようなものの中で焼き上げられカリッとした食感が特徴的であり、胡椒などのスパイスが効いた屋台メシである。台湾では胡椒饅のように独特の香りがするスパイスを使ったグルメが数多く存在している。そのため街中は常に八角の香りが漂い、最初は八角などの香りに驚くこともあった。士林夜市ではピーナッツロールアイスも食べた。ピーナッツの大きな塊から粉末状にしたピーナッツをクレープの生地よりも薄いものにアイスと好みでパクチーを入れて食べるものである。日本でいうコンビニアイスのような感覚で食べる屋台グルメであり、食べ応えあるものであった。アイスにパクチーを入れて食べるというのは私にとって衝撃であり、抵抗感があった。パクチーと一緒に食べるとパクチーの香りがすごく広がり、アイスとの相性が良いものであった。消費者は幅広い年代で、だれでも食べやすい・手に取りやすいグルメだと感じた。士林夜市では日本人観光客が多く、台湾の中でも人気度の高い観光名所であると身をもって実感することができた。2月19日（3日目）では台北から台南へ台湾の新幹線で移動した。台湾の新幹線は日本との違いは少なく、日本人からしたら乗りやすい乗り物だと感じた。台湾の新幹線では日本と同様に駅弁を食べることができ、ここでも台湾の食文化を体験することができた。弁当の中には煮卵やカボチャ、豆の炒めものなど日本でなじみのある食材も多かったが、味付けは台湾独自の味

付けで全体的に甘めであった。

台南に移動し、最初感じたことは、気候の違いである。台北は少し肌寒く上着を持っていないと過ごしにくい気候であったが、台南は半袖でも過ごせるくらいの気持ちいい気候で肌寒い気候の日本から台湾に向かった私にとってはとてもありがたい気候であった。また、台南では有名な火鍋店に行き、火鍋を食べた。火鍋のスープは様々な種類があり、自分たちで好きなスープを選ぶことができる。具材は肉、野菜、きのこなどであり、ほかにもゴマ団子のようなものやケーキのようなものも食べることができる。この店は観光客向けでもあるが地元の若者も利用していた。午後14時頃に店に行ったが地元の人も多く利用していて、日本の社会人の「お昼の時間」との違いを感じることができた。台南は昔ながらの街並みが多く、「どこか懐かしい」を感じることが多かった。街中にある建造物も歴史的なものが多く、台湾の中で歴史を学ぶなら台南が一番適していると感じた。台湾は日本に統治されるまえにオランダに統治されていたが、その影響でキリスト教会が多く、台湾の中でも台北より台南の方が多く感じた。寺院と教会は町の中に溶け込み、どちらの施設も地域住民に受け入れている印象であった。歴史的建造物と教会という私自身はあまり見かけることのなかった景色を見て、台湾の歴史を目で少しながら確かめることができた。2月21日には再び台北に移動し、国立故宮博物院を訪れた。博物院では中国の歴史、台湾の歴史を学ぶことができ、1時間ほどで全体を鑑賞することができる。訪れる人を見てみると、日本からの修学旅行生、日本人観光客、ヨーロッパ・アメリカ人観光客、韓国人観光客など世界各国の人たちが訪れていた。博物院の中も観光用にきれいに整備されていて、展示物をととても見やすい。故宮博物院から再び台北市の中心部に戻ってきて、若者の街である西門町にも訪れた。西門町は若者向けの飲食店や古着屋、屋台などが存在し日本でいう原宿のような街であった。ここでは台湾の有名なスイーツであるかき氷をたべた。台湾は果物も有名でかつ新鮮であるので、かき氷の上に載っている果物もいつでもおいしく食べることができる。また、西門町で有名なふわふわドーナツも食べることもでき、街歩きを満喫することができた。西門町にいる人たちを見ると観光客も多いが圧倒的に台湾の若者が多く、「若者の町」と呼ばれている理由を実感することができた。台湾の若者は日本の若者に似ていて、異文化を感じることはあまりなかったが台湾人と日本人の性格が似ていて日本人に「台湾に何回も行きたい」と思わせる要因であると感じた。

全体のまとめ

今回のスタディツアーは主に台湾の食文化と消費者を中心に調査した。台湾の食文化は独自のものも多いが、日本人好みの味が多く日本人の初海外に適している国であると感じた。食材は新鮮なものも多く、比較的安全に食べることができた。消費者は地元の人が朝食や昼食、夕食に屋台の料理や街中の食堂で料理を食べていることが多かった。しかし、観光客を見かけることが思いのほか多く、台湾の食文化の人気度具合を感じることができた。また、台湾の華やかな面を知ると同時に日本と似たような観光産業が発展していて観光客が多い一方で、台北駅では、家を持っていない人たちが駅の屋根の下で寒さをしのぎながら過ごしていたり、地下鉄のベンチで大きな荷物を持ちながら過ごしていたりと、貧富の格差を身をもって知ることができ、自分の「今の暮らしのありがたさ」をツアーを通して学んだ。



① 2月18日 豆花



② 2月20日 台南



③ 2月18日 胡椒饅



④ 2月18日 ピーナッツロールアイス



⑤ 2月21日 国立故宮博物院



⑥ 2月21日 西門町



⑦ 2月19日 火鍋店のゴマ団子



⑧ 2月21日 台湾のかき氷

台湾スタディツアーを通して

B241G290Y 山本 璃乃

この台湾スタディツアーを通して、私は日本の食品やファッションブランド、飲食チェーン店などがどれくらい台湾にあるのかとそれらの日本と台湾での販売価格の違いを調査した。行ってみた結果、台湾にはショッピングモールにGUやユニクロなどのファッションブランドがあると思っていたが見つけれなかった。日本の飲食チェーン店は「すき家」「松屋」「スシロー」「丸亀製麺」「COCO 壺番屋」など多くの種類があったことが印象に残っている。でも中に入って実際に食べてみることはできなかったので次台湾に行ったときには食べに行ってみようと思った。メニューや味はどれくらい同じなのかやどれくらいの価格で販売されているのかを調査したい。すき家は看板だけ見たが私が日本で見たことがないメニューがあったし、日本のチェーン店ではないがマクドナルドでご飯を買ったときも日本には無いメニューが多かったので他の日本の飲食チェーン店も台湾独自のメニューがありそうだと感じた。日本の総合ディスカウントストアであるドン・キホーテもあり、店内は幅広い品揃えがあって迷路のように商品が並べられており日本のドン・キホーテそっくりだった。店内のPOPも日本語で書かれていて日本にいる気分だった。だが日本のPOPは赤や青など遠くからも目立つようなはっきりとした色が多いが台湾は薄いピンクや黄色など淡い色が多く可愛い雰囲気だった。台湾は価格が安いイメージを持っていたが比較してみると日本よりも高いものが多かった。中には日本の値段の倍ほどもするものもあって驚いた。下に実際に台湾で見たものの値段と日本での値段の違いをまとめた。(台湾ドルは日本円に換算している)

○食品

台湾で売られていた日本のもので一番食品が多かった。お菓子はクレヨンしんちゃんのものが多く、日本でも売られているチョコビや、日本では売られていないグミやキシリトールガムのようなガムなど色々な種類のお菓子が売られていた。また日本の企業であるサンリオのキャラクター（ハローキティやシナモロールなど）のジュースが売られている自動販売機があった。種類がたくさんありどのキャラクターが出てくるのか分からない仕組みになっていた。また日本のお酒がたくさんあり、アサヒビールや麒麟ビール、ほろよいなど種類が豊富であった。他にはジュースやレトルトカレー、カップ麺、鍋のもとなど様々な種類の日本の食品が販売されていた。

- ・ Calbee フルグラ 380 g (カルビー株式会社) 1120 円 (台湾)、498 円 (日本)
- ・ おいしい蒟蒻ゼリー (株式会社たらみ) 265 円 (台湾)、140 円 (日本)
- ・ アサヒ生ビール黒生 350ml (アサヒビール株式会社) 225 円 (台湾)、213 円 (日本)
- ・ ヤンヤンつけばーいちご味 (ヤマザキビスケット株式会社) 112 円 (台湾)、100 円 (日本)
- ・ つぶぐみ 80 g (株式会社ブルボン) 292 円 (台湾)、150 円 (日本)
- ・ 小梅 59.4 g (株式会社ロッテ) 265 円 (台湾)、220 円 (日本)

○化粧品

オーストラリアに行ったときに「CANMAKE TOKYO」の化粧品がかなり広いスペースに売られていたので台湾にもあると思っていたが台湾では見つけることができなかったのが驚いた。でもオーストラリアには無かった「HEAVY ROTATION」の化粧品が多くのお店で見つかった。またオーストラリアでは日本のコスメが多く販売されておりスキンケア用品は見当たらなかったが、台湾ではコスメよりも洗顔料や化粧水、乳液といった保湿剤が多く販売されていた。

- ・HEAVY「ROTATION 眉ペンシル（株式会社伊勢半）1361 円（台湾）、880 円（日本）
- ・HEAVY「ROTATION 眉カラーリング（株式会社伊勢半）1124 円（台湾）、880 円（日本）
- ・Biore スキンケア洗顔料（花王株式会社）355 円（台湾）、359 円（日本）
- ・Skinlife 薬用泡のふんわり洗顔（牛乳石鹸共進社株式会社）1165 円（台湾）、605 円（日本）
- ・豆乳イソフラボンとろける乳液（常磐薬品工業株式会社）1687 円（台湾）、990 円（日本）

○その他

- ・桐灰カイロ 10 枚入り（小林製薬株式会社）355 円（台湾）、404 円（日本）

今回台湾に行って、台湾はアジアの国なので日本とあまり変わらないかなと思っていたが、食べ物や街の匂い、トイレ、ホテルの部屋など日本と違うところが多くあって驚いた。日本はしっかりとした丁寧さがあって街並みが整っているため、落ち着きや安心感を感じられる。どこのお店に行ってもサービスが行き届いていて、思いやりや温かさが身に染みる。一方で台湾はローカルな雰囲気、飾らない人々の優しさが素敵だと感じた。市場の賑やかさやお店の人と客の何気ない会話など、自由で活気のある空間が広がっていた。このように日本と台湾は違うけどそれぞれに違う良さがあってどちらも魅力的だった。このスタディツアーでは中国語をほとんど知らないまま行ってしまっただけで日本語と英語だけを使う旅になったので次行くときは簡単な中国語を覚えて行って中国語でのコミュニケーションにも挑戦してみたい。



実際に販売されていたもの（一部）

高知大学人文社会科学部 人文社会科学科国際社会コース
「2024年度 国際社会実習報告書」

2025年 7 月 発行

編集・発行 高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース
〒 780-8520 高知市曙町 2-5-1
TEL 088-844-8425
FAX 088-844-8249
<http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/kokusai/>

2024 年度

国際社会実習報告書

インドネシア／台湾